様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７７００２４

研究課題名（和文）中世新義真言寺院における華厳思想に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Kegon Thought in Shingi Shingon Buddhist Temples in the Medieval Period

研究代表者
野呂　靖（NORO, Sei）

龍谷大学・文学部・講師

研究者番号：７０６１９２２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、従来十分に明らかでなかった室町時代の南都仏教、とくに華厳宗における教学の実態について、東大寺戒壇院長老であった普一志玉の資料（智積院蔵『五教章聞書』六帖、真福寺蔵『華厳五教章視聴記』六帖）を検出・翻刻し、その思想内容について分析を行った。
　その結果、志玉は根来寺・真福寺などに拠点をもつ複数の真言僧と交流をもち、彼らによって志玉の『華厳五教章』講説が記録・伝持されていった点、また思想的には密教説の導入が顕著にみられるとともに、室町期までの日本華厳の系統を整理し、その教学を整理する意図がうかがえる点など、従来未詳であった華厳学の実態について新たな知見を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：In this research, I investigated the actual condition of Nara Buddhism in the Muromachi time period, especially the doctrine of Kegon tradition (kegonshu) of those days, which has never been obvious. Specifically, I discovered and reprinted the manuscripts written by Shigyoku, an abbot of the sub-temple of ordination platform (kaidan ’in) in the Todaiji temple, such as Gokyosyokikigaki six volumes owned by the Chishakuin sub-temple and Kegongokysyoshichoki six volumes by the Shinpukuji temple, and examined the thought described in these texts.

研究分野：仏教学・日本仏教

キーワード：東大寺　根来寺　真福寺　志玉

１．研究開始当初の背景

日本中世の華厳宗については、高山寺の明恵（1173−1232）や東大寺尊勝院の宗性（1201−1292）、東大寺戒壇院の凝然（1240−1321）など、高山寺・東大寺を代表する鎌倉初中期の学僧に関する研究が積み重ねられてきた。しかし、鎌倉期に形成された華厳学の展開期に相当する南北朝・室町期から江戸期にかけての華厳学の実態については、研究が十分に進展しておらず、鎌倉期の諸寺院における華厳学がいかなる寺院（院家）の、いかなる学僧によって継承されていったかといった基礎的な問題自体が未検討の状況にある。

２．研究の目的

本研究では、従来「衰退してみるべき成果がない」とされてきた中世後期の華厳学の思想的実態について、智積院新文庫所蔵資料を中心とする新出文献の調査研究を通して明らかにすることを目的とする。

中世後期の華厳学は、東大寺・高山寺など鎌倉期における華厳学の拠点だけでなく、根来寺・智積院・真福寺などの真言宗寺院において担われ、高度な教学研究が継続されていた。本研究は、「真言宗僧によって担われた華厳学」という新たな視点から、新発見資料の翻刻研究、および既知の資料との詳細な比較検討によって、南北朝期から江戸期に至るまでの間、華厳学がいかなる人物・院家によって担われ、思想的にいかに変遷・展開していったのかを明らかにする。

これにより、従来実態が明らかとなっていない東大寺・高山寺以外の華厳研究の拠点が判明するだけでなく、奥書（識語）等の調査にもとづく聖教の書写・伝持過程の分析を通して、真言寺院と南都諸寺院との交流、教学研鑽のあり方についても知ることができ、その成果は単に華厳宗研究のみならず、広く中世仏教研究に資するものであると考える。

３．研究の方法

智積院新文庫、および大須真福寺に伝持された華厳関係典籍に注目し、以下３点の統合的推進を行う。

（１）まず中世後期において華厳学を継承した寺院と学僧について、その交流関係にも留意しつつ解明を行う。とくに智積院、大須真福寺を中心とする寺院の資料調査、および関連する南都諸寺院の調査を通して整理・研究を行う。

この作業により、中世後期においては鎌倉期に華厳学の拠点となっていた東大寺・高山寺のみならず、根来寺を中心とする真言寺院において『華厳五教章』など華厳文献の書写・伝持や、注釈・講説活動が活発に展開していたこと、すなわち新たな華厳研究の拠点が判明すると考えられる。また奥書（識語）の調査による聖教の書写・伝持過程の分析を通して、真言僧らが南都諸寺院に遊学し、華厳文献の書写を行うとともにそこで行われた講説の記録をまとめるなど積極的な教学研鑽の実態を知ることができる。こうした検討を通して、僧侶や寺院間のネットワークのなかに、この時期の華厳思想を位置づけることができると考えられる。

（２）次に東大寺戒壇院長老であった普一国師志玉（1383−1463）による『華厳五教章』の講説資料である以下３点の文献について、本文の翻刻ならびに異本対校を行う。

・『華厳五教章聞書』（智積院新文庫所蔵）
・『華厳五教章私』（同）
・『華厳五教章視聴記』（大須真福寺所蔵）

（３）最後に以上の作業によって判明した内容に基づき、中世後期の華厳宗の教理思想がいかなる寺院・僧侶の影響関係のなかで形成され、いかなる点で中世初・中期の傾向を継承し、また近世の華厳学へと展開していったのかについて明らかにする。

４．研究成果

上記の研究目的にもとづき、以下２点の成果を得ることができた。

（１）東大寺戒壇院長老志玉の講説を記録した智積院蔵『五教章聞書』、大須真福寺所蔵の『五教章視聴記』の写本の調査、内容分析を行った結果、両資料が文安年間に東大寺戒壇院において実施した『五教章』講説にもとづくものであり、とくに以下の点が明らかとなった。

第一に、この時期、東大寺戒壇院は、文安三年一月二日の出火によって戒壇などを含め受戒堂・講堂・談義所などを同右の多くを焼失しており（東大寺雑集録巻七）、文安年間はこうした伽藍復興期に相当していた。志玉による講説は、伽藍の復興と並行して進められた教学的な戒壇院の復興を意図されたものであったと考えられることを明らかにした。

さらに、『五教章視聴記』の分析を通して、こうした再興期の戒壇院において志玉の講説を記録していた真言僧の存在が明らかとなった。『視聴記』は、真福寺第八世任舜の記録によるものであるが、任舜は本書の他にも倶舎・華厳文献を多く書写・伝持しているのが特徴であり、志玉講を聴講していた文安三年の間には志玉の所持本を用いた『五教章』注釈書の書写活動も頻繁に行っている。

また任舜は真福寺初代能信の百回忌法要にあたり、法要の次第などを後代の亀鏡とすべく詳細に記録するなど真福寺の中興を意識しており、晩年には八宗（律・倶舎・成実・法相・三論・天台・華厳・真言）の教理の要

点と祖師の系譜を記した綱要書『八宗事』(龍谷大学図書館蔵）を著述するなど精力的な活動を行っている。

従来、真福寺の住持については、根来寺中性院流の聖教を伝えた初代能信（1291–1354)、東大寺東南院聖珍より伝授を受けた第二世信瑜（1333–1382）など真福寺創成期の学僧が著名であったが、中世後期においても真福寺が重要な教学拠点となっていたことが明らかとなった。

第二に、『五教章視聴記』については、教学面についても重要な教理展開を窺うことができた。本書は『華厳五教章』（和本）に対する随文解釈の形式を取っており、志玉の義については「長老仰云」などとして、筆録者である任舜自らの見解を「私云」と追記する形をとっており、宋代の道亭『義苑疏』・観復『折薪記』・師会『復古記』など宋代華厳の『五教章』注疏を多く依用し、日本華厳では東大寺戒壇院凝然の門下にあたる十悟房審乗（1258–1313–？）『五教章問答抄』、称名寺湛睿（1271–1347）『五教章纂釈』を重視している。また明恵を中心とする高山寺義を用いている点も重要である。

さらに、こうした引用傾向とともに注目されるのが、日本華厳の系譜について東大寺尊勝院・戒壇院・高山寺の３系統に分類する認識が示されている点である。すなわち志玉においては、奈良期からつづく華厳学の系統を再整理する意図があったと考えられるのである。

また、教学面においては密教説の導入が顕著に確認できた。なかでも、『五教章』「義理分斉」における十玄門の第十託事顕法生解門について、事法である五指が五仏を表示するなど密教説の「即事而真説」を取り入れた特異な解説が示されているほか、成仏説についても華厳と真言の教理的一致が主張されていた。

こうした教学傾向の背景としては、本書を記録した真言僧任舜の意図が想定できるが、同様に文安年間に行われた志玉講説の記録である『五教章見聞』にも「師云」としてほぼ同様の内容が志玉の説として記されていることから、顕密の教義を対応させる注釈傾向自体が志玉の講説に基づくものであったと考えられる。また、こうした顕密を対応させる解釈の淵源として注目されるものとして、真言と華厳の託事門を全同とみなす明恵門下の順高編『五教章類集記』など高山寺における華厳研究の存在を指摘した。

以上のように、従来不明であった室町期華厳の新たな教学的側面を明らかにしえたことが成果の一つである。

第三に、本研究ではそうした室町期の華厳学に影響を与え、前提となったと考えられる資料についても検討を行った。まず根来寺における華厳学を含めた諸宗に対する理解を知るための資料として重要である根来寺聖憲による諸宗綱要書『王心抄』について写本を網羅的に収集し、基礎的な内容分析および全文翻刻を行った。また、華厳と真言義との対応をはかる教学傾向の淵源の一つと考えらえる明恵門下の文献についても検討を加え、従来未翻刻であった順性房高信撰『六大無碍義抄』二帖（唐招提寺蔵）の翻刻紹介を行った。

（２）上記（１）の研究と並行して、従来未翻刻であった志玉講説『華厳五教章聞書』六帖（智積院新文庫所蔵)、『華厳五教章私』三帖(同)、『華厳五教章視聴記』六帖（大須真福寺所蔵）について全文翻刻を実施した。

『五教章聞書』は根来寺大伝法院学頭であり、初めて能化の称号をもって呼ばれた玄音房道瑜（1422-1493）が筆録し、さらに聖憲など根来寺の学僧による華厳学理解を大幅に加え再治を行ったものであり、真言寺院における華厳学の受容という室町期の新たな教学受容が明らかとなった。本書の刊本は『五教章見聞』などの題名で存在するが、それらとの比較も実施した。

『五教章私』は、室町期の根来寺大伝法院能化である日秀の著述であり、これまで学界未紹介の新資料である。『五教章視聴記』は、『五教章聞書』がもとづく志玉による講説の前年に、同様に志玉によって行われた講説を真福寺住持の任瞬が記録したものであり、両書の比較を行いつつ翻刻を実施した。

従来、日本華厳の教理思想に対する研究は、主に東大寺・高山寺において華厳を「本宗」とする僧侶による著述を中心に進められてきた。そのため、室町期から江戸期にかけての華厳学については、「前代に比して全く寂寞の観を呈するに至った」（湯次了栄『華厳五教章講義』）とされ、「室町時代に入ると再び衰亡の道を歩み、現在のところさほど見るべき成果は認めがたい」（北畠典生「日本における華厳研究の歴史と課題」『仏教学研究』50、1994）とされるなど、衰退の道を歩み、見るべき成果はないとするのが定説となってきた。

しかし、以上３点の翻刻・内容分析を通して、室町期には真言僧を中心とする諸宗の僧との交流のなかで東大寺の華厳学が継承されていったことが判明したのであり、従来の衰退史観は改める必要のあることが明らかとなった。この点に本研究の最大の成果があると考える。

なお当初計画していた上記３点の紙媒体による翻刻テキストの公開については、校正の遅れにより研究期間中に果たすことができなかった。これについては作業を継続中であり、校正が済み次第公開予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
野呂靖、明恵門下における密教理解―唐招提寺蔵『六大無碍義抄』解説並びに下帖翻刻―、日本古写経研究所研究紀要 2、査読無、2017年、1–27

野呂靖、中世真言宗における諸宗教学の受容について―富山大学附属図書館ヘルン文庫所蔵『王心鈔』翻刻–、仏教学研究 71、査読有、2015、47-81

野呂靖、普一国師志玉の華厳学―『五教章視聴記』を中心に―、印度学仏教学研究 64(2)、査読有、2015、72-78

〔学会発表〕（計２件）
野呂靖、明恵と高山寺の教学―宋版『華厳五教章』の受容をめぐって―、龍谷大学アジア仏教文化研究センター「明恵と高山寺」、2016年６月 25 日、龍谷大学（京都府京都市）

野呂靖、真言宗義まことに味わいあり ―頼瑜が依拠した明恵上人門下の思想―、国際仏教学大学院大学 日本古写経研究所 二〇一五年度第一回公開研究会、2015 年 5 月 9 日、国際仏教学大学院大学（東京都文京区）

６．研究組織
(1)研究代表者
野呂　靖（NORO,Sei）
龍谷大学・文学部・専任講師
研究者番号：70619220